

タイル工事マン

～目地が全てを物語る～

#10

本名：本名：貼坂 恒一(はりさかこういち)

出身地：岐阜県多治見市（焼き物の町。タイルは文化財）

幼いころから、足元はタイル、視線の先もタイル。そんな環境で育った恒一。幼少の頃から「平らかどうか」を無意識に見るクセがついていた。小学生の頃、校舎の壁を見ては、「このライン、ちょっと逃がっているな。」と気づき、友達に引かれる。高校を卒業後、父が経営するタイル施工の会社へ入社。見習い時代は、ひたすら墨出し、割付け、下地チェック。貼らせてもらえるのは、誰にも見えないはっこ。

「タイルは貼る前に8割決まる」という親方であり、父の毎日の言葉が一流の職人へ恒一を育てた。「下地が悪ければ、タイルは全部嘘をつく。」

「割付けは、建物のリズムを決める作業。」

「目地幅は感覚じゃなく、計算と経験。」

水平器、レーザー、コテ。道具は増えたが、最後に頼るのは自分の目と手の感覚。恒一は現在、住宅から店舗、外壁まで全ての種類の建物のタイル工事に全国を飛び回る。派手な仕事はしないが、完璧な施工に多くのファンがいる。恒一は今日もどこかで、誰も気にしない目地をチェックし「よし。」と小さく頷いている。

